

無についての問い方・語り方

入不二基義（青山学院大学）

「なぜ、全く何もないのではなくて、何かがあるのか」という、かの形而上学的な問いを「斜めから」眺めてみたい。「正面から」立ち向かうのではなく、その問いの媒介部分である「ではなくて」を疑問視したい。何かがあること（存在）と全く何もないこと（無）を、「(一方)ではなくて(他方)」という排中律保存的な否定関係によって媒介することは、形而上学的な問いとしては不徹底なのではないか。

以下の考察は、「ある」を追跡する道筋と「ない」を追跡する道筋の二つに分かれることになる。前者では『創造的進化』の中のベルクソンの議論を、後者では「そもそもなぜ何かがあるのか」におけるインワーゲンの議論を、「踏み台」として利用する。そしてその先に、一方では、「ある」と「ない」の（疑似）矛盾的な癒着関係を、他方では、「ある」と「ない」の徹底的な無関係性を見いだすことになる。

ベルクソンは『創造的進化』の中で、無の観念に対しての批判を展開して、かの形而上学的な問いを「疑似問題」とであると断じている。ベルクソンは、欠如や消失を「交代」という操作（肯定項）に回収するアイデアによって、「全面的で絶対的な無」という観念の自己矛盾を暴こうとした。

しかし、「交代」という概念は、差異化を含むことによって、否定や空虚の払拭には失敗する（と私は考える）。むしろ、ベルクソンの「肯定主義」をより徹底して、「交代」さえも無意味化する「差異なき端的な充実」にまで歩を進める方がよい（と私は考える）。

しかしさらに、「差異なき端的な充実」には、まだその先が控えている。というのも、「差異なき」は、「まだ差異化されていない（概念化を待っている）」のではなくて、「そもそも差異化が意味を持たない」というより強い意味を持ちうるからである。すなわち、「差異なき端的な充実」は、「概念化以前の実質」だけではなく、「無内包の現実」までも表せる。

「無内包の現実」とは、内容規定から独立の現実性（現にあること自体）である。現実性は、無内包であってそれが全てでそれしかないもので、そもそも差異化が意味を持たない。この最高度の充実としての「無内包の現実」は、認識論的な内容がまったく「ない」とことと存在論的な現実性のみが端的に「ある」とことが一つになったあり方をしている。つまり、「ある」かつ「ない」という（疑似）矛盾的なあり方をしている。

インワーゲンは、「そもそもなぜ何かがあるのか」の中で、かの形而上学的な問いに対して、可能世界という装置を利用して確率的な論証を提示している。それは、「全く何もないこと」が、(不可能ではないにしても)ありそうにない(improbable)ということを示す議論である。

インワーゲンの議論からは、可能世界内部の(1)偽装された無と(2)ほんとうの無、そして(3)可能世界の外部の無という、「無の区別（深まり）」を取り出すことができる。そして、

さらに、(4)可能世界そのものがないこと（可能世界自体の無）という段階も加えることができる（と私は考える）。

この「無の区別（深まり）」を、（可能世界の一つではない）この現実において考えるために、「死後の無」と「未生の無」を比較してみることが有効である。「死後の無」が、私という存在が無くなる「欠如」「喪失」であるのに対して、「未生の無」は、そもそもそういう「欠如」「喪失」でさえない。さらに正確に言えば、「欠如や喪失でさえない」という二重否定的な仕方で（死後の無から）区別されること自体が起り得ないのが、「未生の無」である。その意味で、「未生の無」は三重否定的である。

この三重否定性は、無関係性を指向する否定に他ならず、時間（過去・現在・未来）が関与する全ての場面で働いている。過去は、いま現在との関係に入る前という相を含まざるをえず、決定的なところでいま現在とは無関係である。また、その無関係性は、（時間が推移するものであるかぎり）過去と現在にだけでなく、現在と未来にも及ぶ。すなわち、「前後裁断」と呼ぶのに相応しい無関係性によって、時間（過去・現在・未来）は貫かれている。時間は「前後の無」に充ち満ちているということである。

「現にあること（無内包の現実）」と「前後の無」とは、関係を持ちようがない。前者が非時間的であれば後者とは関係が持てないし、前者が「いま現在」と密接な関係があるとしても、その前後（過去・未来）とは「無関係」である。いずれにしても、関係を持ちえない。この意味で、現実的な「ある」と時間的な「ない」は、否定関係に媒介されるのではなくて、「無関係」なのである。

こうして、かの形而上学的な問いの媒介部分「ない<ではなくて>ある」という否定関係は却下されて、「あるかつない」（矛盾）と「あるはある、ないはない」（無関係）とに行き着く。